

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 4 月 16 日現在

機関番号：17401

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22320160

研究課題名(和文) 有明海・八代海沿岸地域における古墳時代首長墓の展開と在地墓制の相関関係の研究

研究課題名(英文) Study on the correlation of the chief's tombs and the general people's tombs of the Kofun Period in the Ariake Sea and the Yatsushiro Sea coast area located on the western Kyushu Island, Japan

研究代表者

杉井 健 (SUGII, Takeshi)

熊本大学・文学部・准教授

研究者番号：90263178

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,900,000円、(間接経費) 3,270,000円

研究成果の概要(和文)：熊本県地域に築造された首長墓の1つである阿蘇市長目塚古墳(前方後円墳)の1949・1950年調査出土遺物を再整理した。その結果、それが5世紀前葉の築造であることを明らかにした。また、阿蘇市平原古墳群6号墳を発掘調査し、4世紀後葉から5世紀前葉の築造であること、直径30mほどの円墳であることなどを明らかにした。さらに、在地墓制である天草砂岩製の埋葬施設を集成し、また箱式石棺から石障系横穴式石室への発展過程に関する仮説を提示した。

研究成果の概要(英文)：We investigated and analyzed artifacts discovered in the 1949/1950-year excavation of Nagame-zuka tumulus (keyhole-shaped burial mound), which is located on Aso Area of Kumamoto Prefecture and one of the chief's tombs of the Kofun Period. Consequently, we showed clearly that Nagame-zuka tumulus was built in the one-third of the 5th century.

Moreover, we excavated No.6 mound of the Hirabaru Mounded Tomb Group in Aso Area, and showed that it was built during the three-third of the 4th century and the one-third of the 5th century, and that it is circular-shaped burial mound of about 30m.

Furthermore, we collected cists made from Amakusa sandstone which is one of the general people's tombs, and showed the hypothesis of changing from a cist to a corridor-style stone chamber with slab partitions (Se kisho).

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：考古学 古墳 熊本県 長目塚古墳 平原古墳群 天草砂岩 箱式石棺 石障系石室

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者・杉井健は、熊本県地域の古墳時代の様相を解明すべく継続的に調査・研究を行ってきたが、なかでも 2003 年度から開始した天草島嶼部における上天草市千崎古墳群等の実地調査では、砂岩製箱式石棺や初期横穴式石室の動向の一端を明らかにした。その調査成果を基盤として企画した共同研究では、平成 18~20 年度科学研究費補助金の助けも受けながら、八代海沿岸地域に独自に発達する石棺・石室などの在地墓制の様相を調査・分析した。また、報告内容が不十分であった上天草市カミノハナ古墳群出土遺物、および未報告であった宇城市松橋前田遺跡 A 地点出土埴輪を整理し、報告書にまとめた。

(2) そうした調査・研究を進めるなかで問題点として大きく浮かび上がってきたのは、熊本県地域では前方後円墳をはじめとする首長墓の内容に不明な点がきわめて多いことである。たとえば、熊本県地域には墳長 100 m を超す前方後円墳が 6 基存在するが(玉名市稲荷山古墳、山鹿市岩原双子塚古墳、阿蘇市長目塚古墳、宇土市天神山古墳、氷川町大野窟古墳・中ノ城古墳)、当時、それらのうち調査後に正式な報告書が刊行されていたのは野津古墳群所在の中ノ城古墳 1 基のみであった。熊本県立装飾古墳館に隣接する岩原双子塚古墳、あるいは阿蘇谷に築かれた長目塚古墳などは、熊本県地域の古墳時代中期を考えるうえできわめて重要な前方後円墳であるが、埴輪や鉄器など、それらの出土遺物の報告はきわめて不十分なものであった。

(3) 装飾古墳や石障系横穴式石室、阿蘇石製石棺など、熊本県地域には在地に特有の古墳時代墓制がとくに発達するが、それらに関する研究の蓄積は豊富である。しかし、上述したように、古墳時代における政治動向・中央政権と在地勢力の関係など - を考察するうえで鍵となる首長墓の調査・研究は、かなり立ち後れていた。

そこで、在地墓制の研究と並行して、首長墓やその出土遺物の調査・研究を着実に実施することが、熊本県地域の古墳時代研究にとって、もっとも急がれるべき課題の 1 つであると考えられた。日本列島の古墳時代史のなかに正しく熊本県地域を位置づけようとするならば、やはり首長墓の動向を明らかにしたうえで、首長墓と関連させるかたちで在地墓制の内容が考察されなければならない。こうした認識のもと、前回の共同研究からの継続性も考慮し、本研究課題を構想するに至ったのである。

2. 研究の目的

有明海や八代海に面した地域およびその周辺に築造された前方後円墳をはじめとす

る首長墓と、箱式石棺や石障系横穴式石室、装飾古墳といった在地墓制とがどのように関係しながら展開するのかを、首長墓の測量・発掘調査等によって得られたデータ、および未報告のままとなっている古墳出土資料を整理・分析する作業を通じて明らかにする。とくに、熊本県地域において在地墓制の特徴が顕著にあらわれる古墳時代中期に着目し、当該時期の中央政権がどのように地方支配を実体化させていったのかについて考察することを目指す。

また、地元の若手考古学研究者とともにこうした調査・研究を行いながら、今後も継続的に未報告資料を整理・公開するための方策を探ることも目的の 1 つとする。

3. 研究の方法

(1) 有明海・八代海沿岸地域に築かれた古墳に関するデータを収集・調査・分析する。具体的には、上天草市カミノハナ古墳群の測量調査を実施し、また、在地墓制の 1 つである箱式石棺あるいは石障系横穴式石室の動向を分析する。

(2) 阿蘇地域に築かれた古墳に関するデータを収集・調査・分析する。具体的には、阿蘇市中通古墳群所在長目塚古墳出土遺物の再整理作業、および、阿蘇市平原古墳群の測量・発掘調査を実施し、古墳時代中期における熊本県地域の首長墓の動向の一端を明らかにする。

また、阿蘇は九州島の中央に位置し、そこから流れ出る筑後川や菊池川、白川、緑川は有明海に、大野川は別府湾に、五ヶ瀬川は日向灘に注ぐ。そうした河川づたいの道筋は、古墳時代においては情報伝達・文化交流の重要なルートであったと考えられることから、阿蘇地域を介した有明海・八代海沿岸地域と中央政権の関係を考察する。

(3) 研究代表者・杉井健ひとりではすべての資料収集・調査・分析を行うことは困難であると思われるため、熊本県内外の文化財担当自治体職員の方々に研究協力者としての参加を頼み、彼らと共同して調査・研究を遂行する。また、考古学を専攻する大学院生や学部学生の助力を得る。

(4) 研究協力者の方々に、研究課題に沿ったテーマで個別研究を進めていただき、幾度かの共同討論を経て研究成果をまとめ、報告書として出版する。

4. 研究成果

(1) 上天草市カミノハナ古墳群を測量調査し、1~8号墳の分布状況を確認した。カミノハナ古墳群は、天草砂岩を用いた横穴式石室を内部主体に採用するなど、その埋葬施設

はきわめて在地的な特徴を有している。他方、当古墳群の出土遺物については、先に受けた平成 18～20 年度科研費による研究において整理・分析したが、横矧板鋳留短甲をもつなどの点から、中央政権との密接なつながりがかがえる。今後、横穴式石室を再発掘調査し、その構造をより詳細に把握することができれば、在地首長と中央政権との関係を探るための良好な材料を得ることができると思われる。今回の調査成果は、こうした今後の研究の進展に大いに役立つと考える。

(2) 研究協力者により有明海・八代海沿岸地域の在地墓制の動向が詳細に分析された。

天草砂岩を用いて構築された埋葬施設が集成され、その分布が八代海沿岸地域と宇土半島北岸地域にほぼ限られること、そして天草砂岩の埋葬施設への使用は箱式石棺から始まり、やがて竪穴式石室や横穴式石室にも用いられるようになるが、前方後円墳集成編年（以下、集成編年）5 期から 6 期前半になると阿蘇溶結凝灰岩の利用が開始され、徐々に天草砂岩の使用が減少していくという大きな流れが示された（高木恭二・芥川博士）。

屍床配置の変化を軸にすえ、石障系石室の出現および変遷過程に関する新たな仮説が提示された。すなわち、上天草市千崎 5 号墳のような右側（羨道からみた場合の方向）1 列配置から川の字形配置、そしてコの字形配置へ変遷するとの想定が示され、さらに、そうした変遷過程のなかの川の字形配置屍床の石室において屍床全体を板石で囲うことが開始され、それに箱式石棺で行われていた石材加工技術が採用されて石障が成立したと考察された（古城史雄）。

(3) 氷川町大野窟古墳の横穴式石室構造を分析した。大野窟古墳は墳長 120m を超す大規模な前方後円墳で、古墳時代後期後半に位置付けられる。その石室は阿蘇溶結凝灰岩の切石を用いて構築されており、高さ 6.5m と日本有数の玄室高をもつ。切組積み的手法を多用すること、玄門から羨門までの天井が一連の面をなすことが特徴である。とくに後者は、奈良県見瀬丸山古墳の石室の特徴と類似することから、当該時期に中央政権と八代海沿岸地域の有力首長とのあいだに密接な関係が存在したことを指摘できる。

(4) 阿蘇市長目塚古墳の 1949・1950 年調査出土遺物を再整理し、詳細な実測図と写真を用いた報告書を作成・出版した。

研究協力者（西嶋剛広）により、長目塚古墳出土のガラス玉においては、小口面処理技法と大きさ、色調とのあいだに有意な関係が成立することが示されるなど、さまざまな新知見が得られたが、なかでもとくに重要なのは、長目塚古墳の築造時期が集成編年の 6 期後半から 7 期初頭、須恵器編年では T K 73 型

式段階後半から T K 216 型式段階初頭、すなわち古墳時代中期中葉でも早い段階であると考えられたことである。

これが認められるとすれば、その時期は熊本県地域に窰窯焼成による円筒埴輪が導入される直前の時期であると考えられ、合志川中流域の熊本市植木町慈恩寺経塚古墳や熊本市城南町琵琶塚古墳との関連が想定される。さらに、墳長が 111.5m で、その規模が熊本県地域でも五指に入る前方後円墳である点に加えて、前方部石室出土鉄鍬や墳丘出土須恵器の特徴を考慮すると、古市・百舌鳥古墳群を造営した中央政権との密接な結びつきも想定される。長目塚古墳の築造意義は、たんに阿蘇地域のみではなく、日本列島における古墳時代の政治動向のなかで考察されるべきことがらであることが、より明確になったのである。

くわえて、今回明らかにした長目塚古墳の築造時期は、これまで壺形埴輪の存在から集成編年 5 期頃とされてきた従来の見解とは大きく異なる。このことから、従来壺形埴輪の編年やその時期的位置付けについての再考が必要であることを提示した。

(5) 阿蘇市平原古墳群に所在する 6・7 号墳の測量図を作成し、6 号墳の発掘調査に着手した。6 号墳の発掘調査は今後も継続して実施する予定であるが、現段階までに明らかになった要点は以下の通りである。

6 号墳は葺石を有する 2 段階築成の円墳で、直径が東西約 31m、南北約 30m の規模をもつ。

6 号墳の墳端には幅約 2 m の平坦面がめぐるが、礫は敷かれていない。周溝は存在しない。

段築テラス面には小礫が敷かれ、その復元される幅はおよそ 1.5m である。

出土遺物には壺形埴輪と土師器がある。従来編年観に対応させると、壺形埴輪は集成編年 4 期、土師器は 6 期前後となり、両者の時期的位置付けに不整合が生じる。この点の解明は今後の大きな課題である。

(6) 研究協力者が行った個別テーマ研究においても多くの成果が提示された（杉井健編著 2014 『長目塚古墳の研究』所収）。

なかでも、阿蘇市域で出土した赤色顔料の理化学的分析結果がまとめられた点は重要である（志賀智史）。とくに、ベンガラ（非 P）のなかに通常のパイプ状粒子よりも 10 倍以上太い巨大なパイプ状ベンガラ粒子を含むものがあることが明示され、従来ベンガラ（非 P）と一括していたものを細分できる可能性が示唆された点は注目に値する。

阿蘇谷西側の地中には褐鉄鉱（リモナイト）が豊富に分布しており、当地の弥生時代後期の遺跡ではこれを原料としたベンガラ生産が行われていたことが推定されている。今後、阿蘇谷のベンガラの特徴がより明確に

とらえられれば、弥生時代から古墳時代におけるベンガラ生産と流通の研究が大いに進展すると思われるが、今回提示されたデータはそうした今後の研究に大きく寄与するものといえるだろう。

(7) 本研究において、古墳時代中期の八代海・有明海沿岸地域、および阿蘇地域を含むその周辺では、中央政権との密接な関連を有する前方後円墳が築造されることと並行して、石障系横穴式石室に代表されるきわめて在地的な墓制が発達することがより明確に示されたと考えられる。今後は、九州島全体を視野に置き、中央政権からもたらされる情報や文物がどのようなルートを経て伝わったのか、九州島内の地域間関係も考慮しながら、調査・分析を継続していきたいと思う。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

杉井 健、「漆塗り製品」、『古墳時代の考古学』、査読無、第 4 巻、2013、189-202 頁

杉井 健、「古墳時代の繊維製品・皮革製品」、『講座日本の考古学』、査読無、第 8 巻、2012、197-236 頁

杉井 健、「マロ塚古墳出現の背景」、『国立歴史民俗博物館研究報告』、査読有、第 173 巻、2012、541-562 頁

杉井 健、「石室の構造」、『大野窟古墳発掘調査報告書』(氷川町文化財調査報告書第 2 集) 査読無、2012、47-73・86-88 頁

杉井 健、「熊本県阿蘇市中通古墳群の基礎的研究 1」、『熊本古墳研究』、査読無、第 4 巻、2011、13-22 頁

[学会発表](計 3 件)

池田朋生、坂口圭太郎、松本博幸、朽津信明、杉井 健、「古墳時代の八代海沿岸における砂岩製埋葬施設の表面加工」、日本文化財科学会第 30 回大会、2013 年 7 月 6 日、弘前大学

杉井 健、「古墳時代前期における靴(矢入れ具)の生産とその意義」、第 1 回城の山古墳シンポジウム、2013 年 3 月 3 日、胎内市産業文化会館ホール

杉井 健、「肥後地域における首長墓系譜変動の画期と古墳時代」、九州前方後円墳研究会第 13 回大会、2010 年 6 月 20 日、鹿児島大学

[図書](計 4 件)

杉井 健編著、熊本大学文学部、『長目塚古墳の研究』、2014、本文 203 頁・図版 68 頁

杉井 健監著・留野優兵編、熊本大学文学部考古学研究室、『平原古墳群調査報告 2』(考古学研究室報告第 49 集) 2014、本文 28 頁・図版 8 頁

杉井 健(他 8 名、4 番目)、サンライズ出版、『古墳時代前期の王墓 - 雪野山古墳から見えてくるもの - 』、2014、264 頁

杉井 健監著・安田未来編、熊本大学文学部考古学研究室、『平原古墳群調査報告 1』(考古学研究室報告第 48 集) 2013、本文 38 頁・図版 8 頁

[その他]

ホームページ等

<http://www.let.kumamoto-u.ac.jp/history/his/koukogaku/contents/excavation/201308hirabaru/201308hirabaru.html>

<http://www.let.kumamoto-u.ac.jp/history/his/koukogaku/contents/excavation/201208hirabaru/201208hirabaru.html>

<http://www.let.kumamoto-u.ac.jp/history/his/koukogaku/contents/excavation/201108kaminohana/201108kaminohana.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉井 健 (SUGII, Takeshi)

熊本大学・文学部・准教授

研究者番号：9 1 0 2 3 1 7 8

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

木村 龍生 (KIMURA, Ryusei)

熊本県教育庁・文化課・学芸員

竹中 克繁 (TAKENAKA, Katsushige)

宮崎市教育委員会・文化財課・学芸員

檀 佳克 (DAN, Yoshikatsu)

熊本市役所・文化振興課・学芸員

西嶋 剛広 (NISHIJIMA, Takahiro)

宮崎市教育委員会・文化財課・学芸員

三好 栄太郎 (MIYOSHI, Eitaro)

熊本市役所・文化振興課・学芸員

緒方 徹 (OGATA, Toru)

阿蘇市教育委員会・世界文化遺産推進室・

学芸員

高木 恭二 (TAKAKI, Kyoji)
宇土市教育委員会・文化課・歴史資料専門
員

芥川 博士 (AKUTAGAWA, Hiroshi)
宇土市教育委員会・文化課・学芸員

古城 史雄 (FURUSHIRO, Fumio)
熊本県教育庁・文化課・学芸員

藤本 貴仁 (FUJIMOTO, Takahito)
宇土市教育委員会・文化課・学芸員

志賀 智史 (SHIGA, Satoshi)
九州国立博物館・学芸部・研究員
研究者番号：90416561